したところ、既存の食品だけでなく価格が高いオーガニック食品を充実させ、消費者が選択できるように並べていた。同じことが日本ですぐ起こるとは考えにくいが、実現すれば面白い。

井川氏　ＧＡＰとは別の規格だが、管内９ＪＡで生産する「十勝川西長いも」の選果場などが食品の国際認証規格「ＳＱＦ」を取得した。ナガイモは米国などへの輸出に力を入れている。海外の受け入れ先が具体的な認証を求めてくるケースは今後増える可能性がある。そうなれば否が応でも取り組まざるを得なくなる。

◇　　◇

―ＧＡＰ以外に、十勝農業が食の安全・安心のためにすべきことは。

渡辺氏　繰り返しになるがＧＡＰへの取り組みをベースに、他の産地としっかり差別化できる商品を開発することだ。食品原料の供給だけをしていても、利益は増えにくい。その前提には、ＧＡＰに沿って生産した農畜産物をＨＡＣＣＰ対応の工場で加工する体制を整えることがある。十勝には多くの農業関連組織があるが、目指すベクトルは必ずしも一致していない印象だ。付加価値向上を目的とした組織を統一し、地域一丸で商品開発に乗り出すことを期待する。

大野氏　消費者とのつながりをいかに深めていくかも重要だ。生産者の思いが十分に伝わっていない一方、食に対する関心を高めている消費者をわれわれが理解し切れていない面もある。行政を含め、地域全体でしっかり情報発信すべきだ。

機械化　消費者の信頼も　井川氏

井川氏　機械化も安全・安心と無関係ではない。ＪＡ中札内村では枝豆生産に力を入れ、加工作業の機械化を進めている。きっかけは人手不足への対応だったが、できるだけ人の手に触れないようにすることで衛生上のリスクを低減できると実感している。機械化によって、消費者から衛生面での信頼を得られる面がありそうだ。

（座談会は2018年3月31日付十勝毎日新聞「農業ガイド」に掲載されました）

❖ GAPの取組例

食品安全
照明器具の破損による異物混入を防ぐため、蛍光灯にカバーをつけるなどの対策をしている
環境保全
農産物を洗浄した廃水は、残さを網などで除去した上で排水する
労働保全
ほ場や道路、施設内の危険箇所について年１回以上の点検をする
人権保護
雇用する労働者と休息時間やメンタルヘルスなどについて年１回以上話し合い、記録する
農場経営管理
各部門の責任者がわかる組織図をつくり、担当者を明確にする

（注）農林水産省のパンフレットより作成

＜ＧＡＰ（グッド・アグリカルチュラル・プラクティス）＞

農業生産工程管理と訳される。農薬や肥料の管理、異物混入の防止など、農畜産物の生産工程で細かくチェック項目を定め、順守するよう求める。グローバルＧＡＰや日本版ＧＡＰでは、生産者が順守しているかを専門機関が認証する。一方、管内ＪＡで構成するＪＡネットワーク十勝は独自の「十勝型ＧＡＰ」を2010年に策定。18年度から、グローバルＧＡＰなどの認証取得を目指すステップと位置付けた。認証の仕組みはないが、管内農業全体の底上げのため生産者に幅広く順守を呼び掛ける。